ブルーノ・ラトゥールの取説

アクターネットワーク論から存在様態探求へ

久保 明教

【DRAFT ONLY】
：本稿は久保明教 2019『ブルーノ・ラトゥールの取説』（月曜社）の序論草稿を出版社の許可を得たうえで公開するものです。書籍とは細部や頁数表記が異なります。本稿からの引用・転載はお控えください。

目次

序論

対応説を超えて／真面目すぎてはいけない／取り扱い上の注意

第一章　テクノロジーとは何か

社会の外側／科学知識の社会学／解釈の柔軟性／アクターネットワーク／非還元の原理／仲介と媒介／テクノロジーへの生成／還元の倫理

第二章　科学とは何か

同時否定／事実らしさ／ネットワークの長短／インターナルとエクスターナル／循環する指示／制作される実在／対応説の棄却

第三章　社会とは何か

領域と関係／二つの社会学／構築とは何か／意味作用／非人間と権力／アクターから学ぶ／社会を変える

第四章　近代とは何か

翻訳と純化／実験共同体／知識の政体／二種の代理／ノンモダニズム／存在の諸様態

第五章　私たちとは何か

三つの発想／非還元主義的デトックス／噛み合わないまま話し続ける／汎構築主義の受動性

あとがき

序論

対応説を超えて

まずは本書の概要をあらわす簡単な見取り図を示そう。それは、私たちはいかにしてこの世界について何事かを知りうるのかという問いを通じて、本書で扱うブルーノ・ラトゥールの議論を位置づけるものである。

そもそも「知る」とはどういうことだろうか。一般にそれは次のようにイメージされる。ある対象を外側から眺めて、その対象を的確に捉える言葉を与えること。言葉ではなくグラフや表や数式かもしれないが、いずれにせよそれらの表現がその対象と正確に対応することが、知っていることの条件とされる。例えば、誰かがある対象 X について「X とは何ですか？」と専門家に尋ね、専門家は「X とは〇〇です」と答える。この時、「〇〇」という表現が対象 X と正確に対応していることが一般に期待されており、もしそうでないことが明らかになれば専門家は専門家としての地位を疑われることになるだろう。

何らかの対象を指し示す表現を「表象」と呼ぶのであれば、不正確な表象を修正し、新たな対象を補足し、対象と表象の適切なセットを増やしていくことによって、私たちが生きるこの世界の全体についてさえ、いつか知ることができるかもしれない。知る者と対象の特定の関係性から生じる影響は知識を歪めるものであり、できるだけその影響を排除することで客観性を保つ必要がある。個々の対象は世界内の様々な事柄と関係しているから、対象からの影響を完全に排除するためには、知る者が世界の外側にいなければならない。したがって、知ることは、原理的には、知る者が世界を外側から観察して世界と厳密に対応する言明を与えることとして把握される。

こうした、対象と表象、世界と言語が対応していることが正しく知ることだとする常識的な発想を「対応説」と呼ぶとしよう。それは科学や学問の価値を一般に保証してきたものでもある。科学者もときに間違えるだろうが、その言明は常に対象と正確に対応するように修正されうるし、修正されなければならない。科学はより正確な表象を生みだすことで進展し、偉大な科学的発見は新たな対象と表象のセットを生みだす。それらは常にこの世界をより理解しやすく、より制御しやすく、より良いものへと変えていく。そのような理解や期待が、「知る」ということ、ひいては学問的な知に対する常識的な態度だろう。

しかしながら、対応説には根本的な難点がある。急がずに考えればわかることだが、私たちは世界の外側になど**いない**。私たちはこの世界の内側にいて、他の存在から常に影響を受けている。対象に表象を与えようとする者自身が対象と何らかの仕方で関係しており、その

関係のあり方が対象にいかなる表象が与えられるかを左右する。純粋に知識を探求しようとする科学者であっても、その個人的な興味関心や、生まれ落ちた地域の文化や、その活動に伴う社会的な関係からは逃れられない。外側から世界を知ることは、内側において世界を生きることに避けがたく結びついている。

知ることのうちにある世界への外在性と内在性。両者の関係は様々に考えられる。最も常識的な考え方において、世界への内在は外在的な知識を歪めるノイズを生みだすものであり、原理的には排除できるし、可能なかぎり排除すべきものとされる。科学者もまた日常生活において自らの関心や文化や社会と結びつきながら固有の思考や行為をなしているが、科学的知識の探求は、それらの「主観的」な要素を可能なかぎり排して合理的に進められることで「客観性」を獲得していく。西洋近代においてこうした考え方が確立され、合理的で科学的な知識を蓄積することで人類文明は発展してきたのであり、私たちもまたその延長線上にいる。こう考えれば、「近代」とは単なる時代区分ではなく、私たちの思考や行為の正当な基盤となりうる要素の集合体、ちょうど、ＰＣやスマートフォンにおけるソフトウェアの動作を支えるＯＳ（オペレーティング・システム）のようなものとして捉えられることになる。

これに対して、あらゆる知識はこの世界の内側に生きるものによって獲得されるものであるから純粋に外在的な知識など存在せず、したがって絶対に正しい知識などありえない、とする立場も考えられる。雑然と「相対主義」や「構築主義」、「ポストモダン」といった言葉に結びつけられてきた発想である。純粋に世界を外から眺めた帰結とされてきた知識もまた、世界の内に生きる者たちによって**構築**されている。世界と表象は純粋に対応するのではなく、私たちが経験する世界の有様と私たちが生みだす表象のあいだをつなぐ社会的な（社会構造や文化や言語や権力からなる）フィルターこそが人々にとっての正しさを規定している。そのことを理解すれば、私たちは真実とされてきたものに囚われず、思考し行為する自由をえる。世界への内在を正しく知ることによって、外在性が再生されるのだ。とはいえ、そのような知識もまた、社会的フィルターによって規定されているという批判は生じうる。こうして、知る者は常に内在と外在の間を往復することになる。それでも既存の知識を徹底的に疑い、望むらくはより良いと思われるフィルターに置き換えていくことで、近代というＯＳをアップデートできるだろう。だが、こうしたフィルター付きの対応説において、絶対的な知識に対する懐疑や批判それ自体が肯定される限り、何が「より良い／悪い」のかを判定できる基準がどこから生じているのかを問うことは難しくなる。

二つの発想は、明確に対立していると同時に同じ前提を共有している。それは、私たち人

間の営為における世界と言語の対応によって知識の正しさを保証する対応説である。第一の発想は対応の原理的な成立可能性と漸進的な精緻化を、第二の発想は対応の原理的な不可能性と実践的な柔軟性を重視する点で異なるにすぎない。

だが、第三の発想もありうる。私たちはこの世界の内側に生きているからこそ、世界に関する適切な知識を獲得できるのであり、その一つが外在的な知識とみなされてきたものである。そう考えれば、**外在は内在に内属する**ことになる。対応説的な発想が染みついた私たちにとって、それ以外の仕方で知識の妥当性を考えることは極めて難しい。とはいえ、世界への内在を前提として外在的とされる知識を捉え直すことも可能である。

例えば、横断歩道に設置された歩行者用の信号機を、歩行者という対象を捉える表象として考えてみよう。

横断歩道から離れて観察する者にとって、「青信号」は歩行者が横断歩道を渡る事態を表わし、「赤信号」は歩行者が横断歩道を渡らない事態を表わす。しかし、そのような観察が可能なのは、歩行者が信号機の変化にあわせて自らのふるまいを特定の仕方で変えている限りにおいてである。自動車が滅多に来ないため歩行者が信号を無視する深夜の横断歩道、人々が信号機に慣れておらず信号より運転者とのアイコンタクトを重視している地域、あるいは信号機が故障してずっと赤色の信号が点滅している場合、信号機の色は歩行者の動きと厳密には対応しなくなる。対応が再建されるためには、信号機や横断歩道や歩行者からなる世界の**内側**が変化しなければならない。深夜に信号を無視することで事故にあう危険性を喚起し、信号を守るよう人々を説得し、信号機のメンテナンス体制を強化しよう。対策がうまくいけば、歩行者のうち誰かが横断歩道から離れ、横断歩道の外側から歩行者のふるまい（対象）と信号機の色（表象）の対応を確認できるようになる。世界の内側にある要素（信号機、横断歩道、歩行者、自動車、自転車、道路網、太陽光等々）が特定の仕方で関係づけられることで、その要素の一部（信号機の色）を外側から世界を表象するものとしてみなすことが可能になるのである。

第三の発想において、世界への内在は、世界に外在する知識の正しさを阻害するノイズを生みだすものでも、知識の社会性を担保するフィルターを生みだすものでもない。むしろ、世界に内在する運動がその派生的な効果として特定の仕方で把握されうる世界のあり方を構築する。この時、「構築」という言葉の意味が、第二の発想とは正反対になっていることに注意してほしい。構築主義的な発想において「構築」とは作りものであること、本当の事実ではないことを意味する。第三の発想において、「構築」とは事実を生みだす唯一の適切な回路である。ただし、構築される事実が「より良い／悪い」ものであるかを判断する基準

は世界の外側に置かれない。例えば、残業続きで疲れた体を引きずって帰宅する深夜、辺りに自動車が全く見えない交差点で、信号が赤であっても横断歩道を渡ってしまうのは「悪い」ことだろうか。このような場合、赤信号は、「自動車を警戒して停止すること」ではなく「自動車を警戒しながら進むこと」に関係づけられうる。それが良いことであるかは、信号機や歩行者や自動車や会社や残業といった世界の内側にある諸要素同士の相互作用、関係性、相互交渉の只中においてその度毎に形成され変動していく。

世界は固定されておらず、その一部でしかないがゆえに表象もまた固定されていない。「知る」ということは、世界と厳密に対応する言明を与えることではない。それは、世界の内側において他の存在者と様々な関係を取り結ぶことそれ自体であり、対応説的な正しさはその派生的な効果の一つにすぎない。

実際、私たちの日常において赤信号は「自動車を警戒して停止すること」と「自動車を警戒しながら進むこと」の間を揺れ動いている。法的な規定とは異なり、実践において信号機の色は歩行者の動きと厳密に対応してはいない。しかし、だからこそ状況に応じた柔軟なふるまいが可能である。信号機と歩行者の間に厳密な対応が取れないことが、多くの場合において信号機をめぐる世界のあり方を妥当なものとしている。このように考えると、より良く「知る」ことが問われる場は、世界と表象の対応ではなく、世界の内側にある諸要素の関係性に移ることになる。「知る」とは様々な要素を関係づけることであり、その良し悪しもまた関係づけの只中において生じる。信号を守らないことは常に「悪い」ことだ（あるいは赤信号でも進んだほうが「良い」ときもある）と感じられるとすれば、それはあなたが信号機をめぐる諸要素に特定の仕方で自らの心身を結びつけているからに他ならない。

もちろん、信号機の例は比喩である。しかしながら、科学的、文化的、社会的に「正しい」とされる事柄もまた、信号機と同じように、世界の内側における諸要素の運動を通じて妥当性を得たり失ったりしているのではないか。そう考えることができるのであれば、対応説を中心に構成されてきた近代というＯＳは、私たちの生を覆う表面上の外観にすぎず、私たちの生の基盤では**なかった**、ということになる。第一の発想が近代という前提を固持するモダニズムであり、第二の発想が近代という前提を保持しながらその刷新を探求するポストモダニズムであるとすれば、第三の発想は近代という前提を放棄して世界を捉える「ノンモダニズム」を構成する。では、世界の内側を生き、様々なことを知り、様々な関係性のなかで行為している「私たち」とは何ものだろうか？

真面目すぎてはいけない

本書で扱うブルーノ（ブリュノ）・ラトゥールは、以上で述べた第一、第二の発想を徹底的に批判しながら第三の発想を推し進めてきた人物である。

ラトゥールは一九四七年にフランスのボーヌに生まれ、ミシェル・セールからの哲学的影響や民族誌学的調査の経験を経て、一九七九年に実験室の人類学的フィールドワークに基づくスティーヴ・ウールガーとの共著『実験室生活』（*Laboratory Life*）を発表し、八〇年代以降はミッシェル・カロンやジョン・ロウらと共にアクターネットワーク論（Actor-network-theory：以後ＡＮＴと表記）の主要な論者として活躍してきた。彼の著作は、科学技術の社会学や科学技術社会論と呼ばれる学際的領域においてＡＮＴを理論的に精緻化するだけでなく、より広範な領域においてＡＮＴの一般的な含意を展開するものであり、その影響は科学技術研究を超えて、人類学における「存在論的転回」や哲学における「思弁的実在論」はもとより、社会学、経営学、組織論、地理学、現代アートなどにも及んでいる。

以上の教科書的な説明において、ラトゥールは、二〇世紀末から二一世紀初頭にかけて幅広く活躍してきた著名な研究者の一人として描かれる。それは間違いではないが、ラトゥールについて学問的に語ることには困難がつきまとう。まずもって彼は、哲学者でも人類学者でも社会学者でもあり、同時に、そのいずれでもないように見える。専門分野が不明瞭なため、個々の学問的コンテクストに位置づけて評価することが難しい。

もちろん、彼の母国フランスには、諸学を横断する強靱な知性をもって学問を革新する者の系譜がある。クロード・レヴィ＝ストロースやミシェル・フーコーといった先達もまた、特定の専門分野に収まらない著作を残している。だが、彼らが、諸学の核となってきた論者や理論（例えば、前者におけるモースの贈与論、後者におけるカントの理性批判）に正面から対峙しつつ自らの思想を展開してきたのに対して、ラトゥールは自らの議論を各分野で正当とされるコンテクストにきちんと位置づけることはない。彼が仕掛けるのは常にゲリラ戦であり、回りくどい揶揄と不明瞭な提言であり、諸学のコンテクストを組み替えることを暗に要求する嗤いに満ちたアジテーションである。

簡単にいえばラトゥールはうさんくさい。その広範な影響とされるものもまた、各分野の内側からみれば、周辺部における一時の流行にすぎないようにも見える。その一方、彼の議論は諸学の中心的なコンテクストに飽いた研究者にとっては魅力的である。前述した第一、第二の発想に依拠する従来のコンテクストを相対化する強力な手段を提供してくれるからだ。しかしながら、ラトゥールの議論や彼が推進してきたＡＮＴは――しばしば誤解されてきたが――それを用いれば各分野の既存のコンテクストにおいて評価される論文を手軽に

生みだしてくれるような汎用性を備えた理論ではない。相対化の後にコンテクストを再編する具体的な手立てが教示されるわけではないために、ラトゥールの導入がスムーズに進むのは、諸学を内側から再編しようとする運動と結びつく場合に限られる。人類学における「存在論的転回」や、哲学における「思弁的実在論」の勃興においてそうであったように。

このためラトゥールの議論には、「単に相対化のための相対化をおこなっているだけではないか」という疑念がつきまとうことになる。社会思想史を専門とする筆者の友人は「ラトゥールは暇つぶしに読むには面白いけど、真面目に扱うものだとは思えない」と語ったことがある。科学技術の人類学を専門とする筆者自身もまた、研究生活の最初期からラトゥールの著作に触れるなかで、しばしば同じ疑念を抱いてきた。彼の議論は、各分野における「真面目な」議論の前提となっている発想をとらないために、必然的に不真面目に見える。だが、筆者自身の研究において、文化／社会人類学の中心的なコンテクストを再編していく運動とラトゥールの議論が結びつくにつれて、私はラトゥールをある程度は真面目に扱わざるをえなくなってきた。同時に、ラトゥールやＡＮＴの議論を既存のコンテクストを再考しないまま導入する多くの論考に対して強い違和感を覚えてきたのも事実である。ラトゥールを真面目に読むことはできるが、真面目に読みすぎてはいけない。彼の議論は、諸学のコンテクストを刷新する運動に寄与する可能性をもつが、コンテクストの再編なしにそのまま適用するとかえって不備が目立つような構成をしている。

本書はまずもって、筆者の友人のような、ラトゥールに関心はあるが著作を読みこむほどではない人々に向けて書かれている。つまり、ラトゥールの議論が種々の学問分野が共通して前提とする発想をいかに相対化するものであり、いかにそれらと異なる考え方を提示するものであるかを検討することで、それが諸学のコンテクストを再編する運動にいかに寄与しうるかを考えてもらうための本である。言いかえれば、本書は、ラトゥールの議論を真面目に扱うべきだと主張するものではない。彼の議論を可能なかぎり明瞭に再構成した上で、それを真面目に扱うべきかを問うものである。

ある論者を不真面目に見せている既存の真面目なコンテクストが再編される時、真面目と不真面目が反転する可能性が生じる。本書はその道筋を描きだすものであるが、その可能性をいかに評価するかは読者に委ねられている。

ただし、ラトゥールを真面目に読むことができるし／真面目に読みすぎてはいけないのは専門分野をもつ研究者に限った話ではない。諸学が前提とする発想を相対化するものである以上、ラトゥールの議論の射程は、専門的な学問領域を超えて人々の日常生活全般にまで及んでくる。

実際、彼の研究を初期から駆動してきた「非還元」という発想は、現代を生きる私たちにとって身近なものになりつつある。例えば、仕事や学業でどうにも結果がだせない人がいるとする。私たちは、その原因を、その人のもって生まれた気質や出身地や家庭環境や社会状況のせいにすることを好まないようになってきた。もちろんそれらの影響はあるだろうが、それらの要素を可能なかぎり対象化し操作可能な状態に置くことで、私たちは自らの生をデザインし、より豊かに自分らしく生きることができるだろう。こうした発想において、個々人の行為や属性を背後にあるなんらかの構造やシステムに還元して固定的に理解することは批判され、忌避される。

「ライフハック」や「拡張現実」や「自己分析」といった言葉の広まりが示すように、生活（Life）や現実（Reality）や自己（Self）は、もはや何らかの必要性や階級や構造にあらかじめ規定されるものではなく、絶えず対象化され分析されうるものとみなされつつある。第一章「テクノロジーとは何か」で詳述するように、ラトゥールの研究は「いかなるものも、それ自体において、何か他のものに還元可能であることも還元不可能であることもない」という「非還元の原理」を中核として進められてきた。仕事や学業での挫折は個々人の背景をなす何らかの要素に固定的に還元することはできないが、それらの要素に一時的に還元することで対象化し、回復の道筋を描くことはできる。第五章「私たちとは何か」で詳述するように、「生とは所与の要素に還元されるものではなく自らデザインしていくものである」という現在一般的になりつつある発想に対して、ラトゥールの議論はそれを学問的に探求するものとなりうるし、そうした発想をともなう営為の限界や問題点を批判的に検討するうえで有効な道具ともなりうる。

研究者でなくてもラトゥールの議論を真面目に扱うことはできるが、真面目に扱いすぎてはいけない。それは彼の議論自体が、真理を探求し開示する研究者たちとそれを真面目に拝聴する一般の人々という階層的な関係性を否定し、両者を対称的に位置づけているからである。例えば、第三章「社会とは何か」で述べるように、社会科学の研究対象である人々の営為が――社会科学者だけが正確に認識できる――構造やシステムに規定されているという発想は放棄され、第四章「近代とは何か」で述べるように、合理的な近代人の観点から前近代的で非合理的に見える人々の営みを理解しようとする発想が退けられる。

科学者と一般人、研究者と聴衆、近代人と前近代人が区別され、一方が他方に価値のある知識を伝授するという図式は、前述した対応説的な知識観に基づいている。科学者や研究者は、世界に対応する正確な表象を与えることのできる人々として一般人から区別される。だが、知ることは関係づけることであるという発想を取れば、関係を生みだし関係のなかを生

きることで世界について何事かを知りうるという点で、研究者も一般人も変わりはない。

実際、ラトゥールは、既存の権威的な知の陥穽に対して限りない愚弄を繰りだす一方で、自らを論敵に取って代わる新たな知的権威として位置づけようとはしない。だから本書は、ある卓越した思想家の教えをわかりやすく説明する入門書でもなければ、その著作を網羅して体系的に研究する専門書でもない。むしろ本書は、ラトゥールの議論がいかに構成されており、様々な環境下でいかに動き、それをどのように用いることができるかについての基本的な部分を示す取り扱い説明書（取説）として書かれている。

取り扱い上の注意

ラトゥールの議論をある一つの機械に擬えるのであれば、それは社交的なようで人見知りで、謙虚なようで尊大な、様々なものと結びつきながら摩擦を起こし、革新的なようで古風でもあり、ブツブツと愚痴をいいながら歩を進め、常にどこか故障していながら大胆にふるまい、抽象的かつ具体的で、あちらこちらと動きまわりながらじっと一点を見つめているような人工物であるだろう。

その取扱いを説明するために、本書では、ラトゥール独特の教養と皮肉にあふれた饒舌な語り口は可能なかぎり抑えられる。主要な著作をとりあげながら、その研究の軌跡を、広く一般に重要とみなされるだろう問いに対する変則的な応答の連なりとして再構成する。「テクノロジーとは何か」(第一章)、「科学とは何か」(第二章)、「社会とは何か」(第三章)、「近代とは何か」(第四章)、「私たちとは何か」（第五章）という五つの問いである。

ラトゥールの応答が変則的であるのは、通常これらの問いに応答するときに自明とされる前提が守られないからである。テクノロジーは人間が作りだした物理的な実体として捉えられるわけではなく、科学は客観的に自然を観察して事実や法則を発見する営為とみなされるわけではなく、社会が人間の集まりとして捉えられることもなく、近代について近代的な語彙をもとに分析されることもなく、「私たち」とは近代的な人間観によって限定されるものではない。否定形の「ない」の連なりによって議論の基礎が作られていく。諸学において分析の前提とされる諸概念の土台が掘り起こされ、「テクノロジー」、「自然」、「社会」、「近代」、「私たち」といった語彙が通常どおりに用いられないことで、探求のための広大な余地がうまれる。そのスペースを埋めるべく、ラトゥールはＡＮＴ論者と共に様々な造語や合成語を案出してきたが、本書で扱うのはそのうちの基本的な部分に留まる。ラトゥールを真面目に扱うべきかどうかを問うという本書の企図において、より重要なのは、諸々の概念において否定形の「ない」が肯定形の「ある」に変換される基礎的な局面であり、その派生

的な用法の有効性については読者の探求に委ねたい。

本書の記述にはラトゥールの議論を要約し再構成した箇所だけでなく、ラトゥールの議論から敷衍できるものとして筆者が提示する議論が含まれている。とりわけ、「外在／内在」や「生成」をめぐる一連の議論は、筆者がラトゥールの議論を既存の学問的コンテクストと結びつけることで導出したものである。「取り扱い説明書」が取り扱いを説明する事柄と隅々まで同じであればその任を果たせないし、ラトゥールをいかに取り扱いうるかは結局のところ彼の議論から何を敷延できるかにかかっている。次章からは、上であげた五つの問いの下にラトゥールの議論を再構成しながら、その含意や有効性を検討していく。

第一章では、「テクノロジーとは何か」という問いの下に、まずは、ラトゥールとＡＮＴが台頭する背景となった、科学的な知識と技術をめぐる社会学的研究の歴史を検討する。とりわけ、科学と技術に関する自律説と社会構成主義の対立に注目し、論考「非還元」を中心として、ラトゥールの議論が両者の還元主義的発想を同時に乗り越える非還元主義の試みとして把握できることを示す。

第二章では「科学とは何か」という問いに対するラトゥールの応答を『科学が作られているとき』と『科学論の実在』という二つの著作から再構成し、第三章では「社会とは何か」という問いに対するラトゥールの応答を『社会的なものを組み直す』における論述を中心として再構成する。

テクノロジー、科学、社会を非還元主義的に捉えるラトゥールの議論を検討した上で、第四章では、それらの実践を還元主義的に捉えることを自明視させてきた近代的な思考の枠組みが検討される。『虚構の「近代」』と『存在様態探求』を中心にして、近代的なるものを、「純化」と呼ばれる還元主義的実践と「翻訳」と呼ばれる非還元主義的実践を絶えず同時に駆動させながら後者を否認し続ける機制として捉えるラトゥールの議論が、「私たちはいまだかつて近代的であったことはない」というノンモダニズムを帰結するプロセスを検討する。

終章となる第五章では、「私たちとは何か」という問いの下に、ここまで検討してきたラトゥールの議論が、私たちの学問的な知と日常的な生活を含む現代の広いコンテクストにおいて、いかなる意義や有効性をもちうるかを考察する。

近代的な論理と倫理を私たちの生の基盤とする常識的な発想。それを突き崩し組み替えていくラトゥールの議論は決して理解しやすいものではない。その取扱いには注意が必要である。極めて難解ではないが、極めて誤解しやすい。一見して不真面目な立論が新たな真面目さを伴う議論へと反転していく筋道を追うためには、真面目に受け取りすぎてもいけ

ない。これらの点に注意して先に進んでいただければ、ラトゥールは案外と魅力的な論者に見えてくる可能性があるし、本書はその可能性を探求するものである。

　では、考察をはじめよう。